

資料

卒業生の能力に関する満足度調査

重久加代子, 川原瑞代, 勝野絵梨奈, 葛島慎吾

【要旨】

宮崎県立看護大学では質の高い教育を実施するために、2017年4月から2023年3月までの中期計画として「教養教育と専門教育が連動した体系的な教育を実施するとともに、教育課程の継続的な評価・見直しを行う」ことを挙げており、評価指標の1つに「卒業生の能力に関する満足度」がある。今回、2017年度から2020年度の取り組みと本調査の結果を報告する。2019年度に実施した本調査は、4つのディプロマポリシーに基づいた能力がどの程度修得され、雇用者側は本学の卒業生の能力にどの程度満足しているのか、看護師として就業している卒業1～3年目の卒業生を対象に上司が記入する方法を用いて全数調査を行った。その結果、回収率は施設が50で48.5%、対象となった卒業生は121で56.3%であった。卒業生の能力に関する施設側の満足度は、5段階評価の「4.やや思う」と「5.思う」の合計が61.2%であり、数値目標の80%には届かなかった。また、4つのディプロマポリシーに基づいて作成した14項目の卒業生の修得度については、「1.そう思わない～5.思う」の番号を点数化して集計した結果、卒業1～3年目の修得度の平均得点は3.44 (3.22～3.72)であった。そして、施設側の満足度と本学のディプロマポリシーに基づいた修得度をピアソンの積立相関係数を用いて分析し、 $r = .737$ にて関連が認められた。これらより、本学の4つのディプロマポリシーに基づいた能力と施設側が求めている能力は一致しており、卒業時の到達目標の強化に向けた取り組みが課題であることが示唆された。本調査結果は、2012年度改正の教育課程で学び、全国の医療機関で看護師として就業している卒業生の学修状況を把握し、教育課程の評価・見直しを行うための有用な資料になると考える。

【キーワード】 学修成果, ディプロマポリシー, 雇用者の満足度, 学士課程卒業生, 能力

I. はじめに

教育の質向上を図るためには、教育課程の継続的な評価・見直しを行う必要がある。宮崎県立看護大学（以下、本学と記す）では質の高い教育を実施するために2017年4月から2023年3月までの中期計画として「教養教育と専門教育が連動した体系的な教育を実施するとともに、教育課程の継続的な評価・見直しを行う」ことを挙げており、評価指標の1つに「卒業生の能力に関する満足度」がある。これまで本学では、2014年10月の「県立看護大学あり方検討委員会」で、医療施設が本学の卒業生を看護職

者として求めているかについて調査し、その結果を報告している（県立看護大学のあり方に関するアンケート調査）。これは県内の全施設を対象にしたものであり、「積極的に求めている」と「どちらかといえば求めている」の合計は65%であった¹⁾。しかし、この調査は、主として雇用者側の本学および本学卒業生への期待の程度を示したものであり、卒業年度に関わりなく県内で就業している卒業生を対象にしたものであったため、本学の教育課程の評価指標としては十分とはいえない。教育の成果は、卒業後の社会や看護実践現場で発揮されるものである。その

ため、卒業生の能力に関する雇用者側の満足度をどのように測定するのか難しい課題であり、調査内容と方法を含めた調査のデザインを模索し、検討した。

本学は、科学的なものの見方・考え方を育てながら看護の概念を体験を通して身につけることができるように、一般教育と専門教育とを体系的に編成している。一般教育はあらゆる看護の状況に対応できる判断力を養うために、諸科学の成果とその過程を重視して学び、普遍性を探求する思考を習慣化するという観点から、普遍科目群（2017年度より普遍分野へ変更）としている²⁾。また、教育課程において、開学以来一貫して4つの教育目標を掲げて教育を行っており、2014年度からはこの教育目標に基づいて、学位授与の判断基準の方針として4つのディプロマポリシーが作成され、提示された。したがって、これらの要素は本学の教育課程における卒業生の能力と捉えることができ、本学はその学修成果を得るために教育課程を整え、教育に取り組んでいるといえる。そのため、「卒業生の能力に関する満足度調査」を行うにあたっては、ディプロマポリシーより期待された能力がどの程度修得され、雇用者側は本学の学修成果としての卒業生の能力にどの程度満足しているのかについて把握することが、中期目標に沿った評価指標を得ることになると考える。

現在、本学では2022年度開始予定の新カリキュラムの構築に向けて、これまでの教育課程の評価が急務となっている。本調査結果は、2012年度改正の教育課程で学んだ後、全国の医療機関に看護師として就業している卒業生の学修状況を把握し、教育課程の評価・見直しを行うための有用な資料になると考える。本調査は、教務委員会の下部組織である専門分野部会、カリキュラム検討チームカリキュラム点検ワーキンググループの「卒業生の満足度調査」担当者が実施し、調査計画の一環として本稿にて報告するものである。

II. 調査への取り組み

1. 調査計画・実施

調査は2017年度から2020年度の4年間で計画し、教務委員会および専門分野部会で報告・検討しながら以下のように取り組んだ。

1) 2017年度

「卒業生の能力に関する満足度調査」の調査デザインを検討し、計画書を作成した。

2) 2018年度

対象となる卒業年度を検討し、卒業後看護師として就業した卒後1～3年目の卒業生に決定した（卒業年度に国家試験に合格できなかった者、休職した者、進学した者を除く）。卒業生の能力に対する評価は個人差があるため全数調査とし、卒業生ひとりに対して1枚の調査票を用いて上司（看護部長、看護師長など）が記入することとした。

次に、調査項目および回答方法を検討し、施設の概要と卒業生の能力に関する調査票を作成した。そして、県内の7施設において卒後1～3年目の卒業生28名の直属の上司を対象にプレテストを実施した（8月～9月）。その結果、調査方法に問題は認められなかったが、3つの調査項目において抽象度が高く評価がしづらいとの意見があったため内容を検討し、調査票を修正した。調査票の詳細は2で述べる。

3) 2019年度

2020年1月～2月に本調査を以下のように実施し、3月に結果をまとめ、教務委員会などで報告した。なお、対象施設と卒業生は、卒業時に届け出のあった就職先の情報とその後に入手できた情報に基づいて決定した。実施に当たっては、無記名によるアンケート調査の手順に沿って、倫理的配慮を行い進めた。調査の対象となる卒業生には、本学のホームページ上で約1.5か月の間「卒業生の能力に関する満足度調査」を行うこと、対象になることに同意できない場合は知らせるように告知した。

(1) 対象施設

対象施設は103であり、宮崎県内は19（18.4%）、宮崎県外は84（81.6%）であった。

(2) 対象となる卒業生

対象となる卒後1～3年目の卒業生は215名であり、

宮崎県内は83名（38.6%）、県外は132名（61.4%）であった。また、卒後1年目は73名、2年目は79名、3年目は63名であった。

4) 2020年度

教務委員会で本調査の集計結果を報告した後に、新たに回収した2施設のデータを加えて、改めて集計を行った。3年間の調査の取り組みと結果をまとめて、本稿にて報告する。

2. 調査票の作成（No.1-2）

1) 施設の概要 調査票No.1

施設の概要は、(1)場所（県内・県外）、(2)開設者における分類、(3)病床数、(4)施設の類型、(5)調査対象となる卒業生の人数、(6)看護職を採用する際に最も大切にしていること（自由記述）の6項目とした。

2) 卒業生の能力に関する満足度 調査票No.2（資料1参照）。

以下に示した4つのディプロマポリシーをそれぞれ3～4の項目に分けて表現し、結果的に14の項目を作成した。ディプロマポリシーの①は看護者としての基本的態度を示している。②は普遍分野、③は専門基礎・専門分野、④は専門分野で主に修得する能力を示している。

①人間に対する深い理解と倫理観を身につけ、人々の喜びや悲しみ、痛みや苦しみを分かちあえる豊かな感性と自己のもてる力を差し出せる温かい心を身につけている。

②人間を取り巻く自然、社会、文化関係を総合的な視野から思考し、社会情勢の変化や科学技術の発達に主体的・創造的に対応する基礎的能力を身につけている。

③さまざまな健康状態の人々と関わることでできる専門知識・技術を修得し、個別な看護ニーズを見だし、科学的根拠に基づいた実践ができる基礎的能力を身につけている。

④自己の専門職に対する誇りと責任感をもち、看護の果たすべき役割を追究し、保健・医療・福祉等関連領域の人々と専門職者として協働で

きる力を身につけている。

プレテストにて、ディプロマポリシーの②の3項目の抽象度が高く評価がしづらいとの意見があったため検討した。その結果、「5.人間を取り巻く自然、社会、文化関係を総合的な視野から思考することができる」は普遍分野の科目で学修する内容を表しており、これ以上具体的に表現する適切な文言がなく、変更による内容への影響が考えられたため修正しないことで専門分野部会および教務委員会の合意を得た。

「6.社会情勢の変化（少子高齢の進展、生活・療養の場の多様化など）に主体的・創造的に対応する基礎的能力を身につけている」と「7.科学技術の発達（医療技術や生命科学の進展など）に主体的・創造的に対応する基礎的能力を身につけている」については、（ ）内に内容を追記した。

次に、回答方法については、ディプロマポリシーに基づいた卒業生の修得度は5段階（5.そう思う～1.そう思わない）、総合的にみた本学の卒業生の能力に関する満足度は中期目標の評価指標として指定された5段階（5.満足～1.不満足）とした。そして、「本学の卒業生の良いところや課題などについて」の自由記述を加えた。

分析は一次集計を行い、4つのディプロマポリシーの得点は平均、合計は4つの得点の平均とした。卒業生の能力に関する施設の満足度とディプロマポリシーに基づいた修得度の関連は相関分析（ピアソンの積立相関係数）を用いた。自由記述は内容の類似性と相違性に従って分類した。なお、集計にあたっては除外基準に該当すると思われるものなどは無効とし、欠損が1つのものは卒業年の同質問項目の平均値を投入した。

III. 調査の結果

1. 回収率

1) 施設の回収率

回答のあった施設は50であり、県内13（26.0%）、県外37（74.0%）で、回収率は48.5%であった。

2) 対象卒業生の回収率

上司より回答のあった対象卒業生は121名であり、県内60名（49.6%）、県外61名（50.4%）で、回収率は56.3%であった。また、1年目は44名（36.4%）、2年目は43名（35.5%）、3年目は33名（27.3%）であった。

2. 施設について

1) 施設の概要

（1）開設者の分類では、医療法人30%、公的医療機関（都道府県・市町村など）24%、学校法人16%、国（独立行政法人国立病院機構・国立大学法人など）12%であり、これらで約8割を占めていた。

（2）病床数の分類では、500床以上44%、200～300床未満18%、100～200床未満18%、400～500床未満14%であり、これらで約9割を占めていた。

（3）施設の種類の分類では、一般病院39%、地域医療支援病院25%、特定機能病院18%、精神病院12%であり、これらで約9割を占めていた。

2) 施設が看護職を採用するのに大切にしていること（自由記述）

自由記述は44施設（88.0%）より回答があり、70の内容が抽出された。記述の内容を分類した結果、以下の11に集約された。〔 〕内に記述数を示す。

- ①人間性（素直さ、誠実さ、明るさ）[12]
- ②看護観・適性[10]
- ③向上心[9]
- ④コミュニケーション[8]
- ⑤社会人としての姿勢[7]
- ⑥相手中心の思考[6]
- ⑦施設についての理解[6]
- ⑧倫理観[4]
- ⑨真摯に取り組む姿勢[3]
- ⑩協調性[3]
- ⑪その他[2]

3. 卒業生の能力に関する満足度

中期目標の評価指標である「卒業生の能力に関する満足度」の数値目標は5段階評価のうち上位2項目

の割合が80%以上となっている。総合的にみた卒業生に関する施設の満足度を表1に示す（表1）。

総合的にみた卒業生の能力に関する施設の満足度の上位2項目である「4.やや満足」と「5.満足」の合計は、卒後1年目56.8%、卒後2年目55.8%、卒後3年目72.7%、全体61.2%であった。最も高かったのは、卒後3年目の72.7%であった。

4. ディプロマポリシーに基づいた卒後1～3年目の修得度：1～5の割合（%）

ディプロマポリシーに基づいた卒後1～3年目の修得度を表2に示す（表2）。5段階評価の上位2項目である「4.ややそう思う」と「5.そう思う」の合計が6割を超えているのは、4項目であった。最も高いのは、ディプロマポリシー①の看護者としての基本的態度である「4.自己のもてる力を差し出せる温かい心を身につけている（74.4%）」であり、次いで「3.人々の喜びや悲しみ、痛みや苦しみを分かちあえる豊かな感性を身につけている（69.4%）」、「2.倫理観を身につけている（67.0%）」、「④の専門分野で修得する能力である「12.自己の専門職に対する誇りと責任感をもっている（63.6%）」であった。

5. ディプロマポリシーに基づいた卒業生の修得度：平均得点

5段階評価の「1.そう思わない～5.そう思う」の番号を点数化して集計し、平均得点を算出した結果を表3に示す（表3）。また、資料2に卒業生のディプロマポリシーに基づいた修得度と施設の満足度の相関を示した（資料2参照）。

ディプロマポリシーに基づいた卒業生の平均得点の範囲は卒後1年目のD②普遍の3.09～卒後3年目のD①基本の3.98であり、総得点の平均得点は卒後1年目の3.25～卒後3年目の3.72であった。また、全体では、3.22（普遍）～3.72（基本）、総得点は3.44であり、卒業生の修得度（能力）に対する施設の評価が「ややそう思う」の4点に達したものは見られなかった。

表1 総合的にみた卒業生の能力に関する施設の満足度 (%) N=121

	1.不満足	2.やや不満足	3.どちらでもない	4.やや満足	5.満足	4と5の合計
卒後1年目	6.8	13.6	22.7	29.5	27.3	56.8
卒後2年目	2.3	11.6	30.2	37.2	18.6	55.8
卒後3年目	3.0	3.0	21.2	42.4	30.3	72.7
全体	4.1	9.9	24.8	36.4	24.8	61.2

表2 ディプロマポリシーに基づいた卒後1～3年目の修得度：1～5の割合 (%) N=121

4つのディプロマポリシーの細目		1. そう 思 わ ない	2. あ ま り さ う お も わ ない	3. ど ち ら と も い え な い	4. や や さ う 思 う	5. さ う 思 う	4と5の 合計
基本	1) -1 人間に対する深い理解を身につけている。	2.5	6.6	35.5	43.8	11.6	55.4
	1) -2 倫理観を身につけている。	2.5	5.0	25.6	58.7	8.3	67.0
	1) -3 人々の喜びや悲しみ、痛みや苦しみを分かちあえる豊かな感性を身につけている。	0.8	8.3	21.5	53.7	15.7	69.4
	1) -4 自己のもてる力を差し出せる温かい心を身につけている。	0	8.3	17.4	49.6	24.8	74.4
普遍	2) -5 人間を取り巻く自然、社会、文化関係を総合的な視野から思考することができる。	3.3	12.4	40.5	38.8	5.0	43.8
	2) -6 社会情勢の変化(少子高齢の進展や生活・療養の場の多様化など)に主体的・創造的に 対応する基礎的能力を身につけている。	4.1	17.4	43.0	32.2	3.3	35.5
	2) -7 科学技術の発達(医療技術や生命科学の進展など)に主体的・創造的に対応する基礎 的能力を身につけている。	0.8	16.5	43.8	36.4	2.5	38.9
専門基礎・ 専門	3) -8 さまざまな健康状態の人々と関わることのできる専門知識を修得している。	5.0	9.9	40.5	40.5	4.1	44.6
	3) -9 さまざまな健康状態の人々と関わることのできる技術を修得している。	4.1	14.0	44.6	34.7	2.5	37.2
	3) -10 個別な看護ニーズを見いだす基礎的能力を身につけている。	2.5	13.2	34.7	39.7	9.9	49.6
	3) -11 科学的根拠に基づいた実践ができる基礎的能力を身につけている。	1.7	10.7	41.3	40.5	5.8	46.3
専門	4) -12 自己の専門職に対する誇りと責任感をもっている。	1.7	6.6	28.1	47.1	16.5	63.6
	4) -13 看護の果たすべき役割を追究している。	1.7	14.9	38.0	35.5	9.9	45.4
	4) -14 保健・医療・福祉等関連領域の人々と専門職者として協働できる力を身につけている。	2.5	10.7	32.2	44.6	9.9	54.5

表3 ディプロマポリシーに基づいた卒業生の修得度(平均得点) N=121

	D①基本	D②普遍	D③専門基礎・専門	D④専門	総得点
卒後1年目	3.51	3.09	3.11	3.30	3.25
卒後2年目	3.72	3.18	3.28	3.53	3.43
卒後3年目	3.98	3.46	3.63	3.81	3.72
全体	3.72	3.22	3.31	3.52	3.44

表4 施設の満足度とディプロマポリシーに基づいた修得度の関連(ピアソンの積立相関係数) N=121

	D①基本	D②普遍	D③専門基礎・専門	D④専門	総合
卒後1年目	0.857	0.802	0.834	0.841	0.900
卒後2年目	0.733	0.600	0.553	0.597	0.692
卒後3年目	0.401	0.250	0.290	0.402	0.403
全体	0.733	0.609	0.642	0.669	0.737

6. 施設の満足度とディプロマポリシーに基づいた修得度の関連

施設の満足度と4つのディプロマポリシーに基づいた修得度との関連をピアソンの積立相関係数を用いて分析した結果を表4に示す（表4）。相関係数の解釈の基準（絶対値 $>.2$ ）により評価³⁾すると、最も強い相関が認められたのは卒後1年目（ $r=.900$ ）であり、次いで卒後2年目（ $r=.692$ ）、卒後3年目（ $r=.403$ ）であった。これらより、全体（ $r=.737$ ）として、施設の満足度と4つのディプロマポリシーに基づいた修得度に相関が認められた。

7. 卒業生の良いところや課題（自由記述）

自由記述は76名（62.8%）の卒業生に対して上司より回答があり、内容を分類した。その結果、110の内容が抽出され、【看護職者として必要な基本的姿勢と態度[59]】と【看護実践における知識・技術的側面[44]】および【その他[7]】に分類された。〔 〕内に記述数を示す。110の内容のなかで、肯定的な意見は67、課題は43であり、肯定的な意見が約6割を占めていた。【その他】は個別な内容であるため、2つの分類について述べる（資料3参照）。

1) 【看護職者として必要な基本的姿勢と態度[59]】

【看護職者として必要な基本的姿勢と態度】は、肯定的な意見39、課題20であり、肯定的な意見が6割以上を占めていた。最も数が多かったのは「真摯に取り組む姿勢：主体性・探求心 [28]」であり、次いで「同僚や他の医療従事者との適切なコミュニケーション [15]」、「社会人、看護者としての自覚・責任 [10]」、「他者との協働、リーダーシップ [4]」、「倫理観 [2]」であった。

2) 【看護実践における知識・技術的側面[44]】は、

肯定的な意見28、課題16であり、肯定的意見が6割以上を占めていた。最も数が多かったのは「患者、家族に対する受容的・共感的態度および、良好な関係性の確立 [18]」であり、次いで「基本的な知識・技術の獲得 [14]」、「対象を多角的視点で捉える [12]」であった。この3つのうち、「患者、家族に

対する受容的・共感的態度および、良好な関係性の確立」は約9割が肯定的な内容であったが、「対象を多角的視点で捉える」では課題が約7割を占めていた。

IV. 調査を終えて

卒業生の能力に関する施設側の満足度について、看護師として就業している卒後1～3年目を対象に全数調査を行った。以下に調査の概観を述べる。

1. 卒業生の能力に関する施設側の満足度について、5段階評価で「4.ややそう思う」と「5.そう思う」の合計は全体で61.2%であり、目標の80%には届かなかった。しかし、卒後3年目は72.7%であり、卒業後の成長の可能性が伺えた。

2. ディプロマポリシーに基づいた修得度において、卒後1年目D①～D④の普遍の平均得点は3.09～3.51であり、総得点は3.25であることからかなり厳しい評価となっている。しかし、施設側の満足度と本学のディプロマポリシーに基づいた修得度には非常に強い相関（ $r=.900$ ）が認められた。この結果は、本学の4つのディプロマポリシーに基づいた能力と施設側が求めている能力が一致していることを示しており、卒業時の到達目標の強化に向けた取り組みが課題であることが示唆された。

3. 卒業生の能力に関する施設側の満足度において、卒後3年目のディプロマポリシーに基づいた修得度の総得点（3.72点）および施設側の満足度（72.7%）が最も高い評価であった。しかし、ディプロマポリシーに基づいた修得度と施設側の満足度の相関（ $r=.403$ ）は最も低い結果であり、施設側が求める卒後1年目と3年目の能力には違いがあることが伺えた。この結果より、卒後3年目の卒業生はディプロマポリシーに基づいた能力に加えて、新たに獲得した能力により施設側の満足度に応えていることが推察された。

4. ディプロマポリシーに基づいた修得度は施設の満足度と相関が認められる（資料2参照）ことから、修得度が低いと施設側が評価した要素が主に含まれ

る普遍や専門基礎・専門の強化を図る必要性が示唆された。

5. 本調査は、中期目標の「教養教育と専門教育が連動した体系的な教育を実施するとともに、教育課程の継続的な評価・見直しを行う」ための評価指標を得るものである。本学は、開学以来人間についての総合的理解を図り自己の人間性を豊かにする幅広い教養と状況に対応できる判断力を培うことを重視し、一般教養と専門教育を体系的に編成しているが、本調査からはその特徴を示す結果は確認できなかった。しかし、「7. 卒業生の良いところや課題（自由記述）」に示したように、卒業生76名について、直属の上司から、量的調査では捉えきれない本学の卒業生の能力に関わる情報を得ることができた。そのため、分析を進め、「本学の卒業生の能力に関する特徴」について明らかにするとともに、教育課程の特徴を学修成果に反映するための評価・見直しを継続する必要があると考える。

最後になりましたが、本学の教育の質向上を図るための調査において、卒業生それぞれに対して丁寧な回答をいただきました施設および卒業生の上司のみな様に深謝申し上げます。

引用文献

- 1) 県立看護大学あり方検討委員会（平成26年10月）：県立看護大学のあり方に関する報告書，参考資料，13.
- 2) 宮崎県立看護大学（2017）：宮崎県立看護大学開学20周年記念誌，8-9.
- 3) 山田覚（2002）：医療・看護のためのやさしい統計学 基礎編，130，東京図書.

資料1 調査票No.2

卒業生の能力に関する満足度調査

No2

*1～3年目の本学卒業生毎に、各々1枚ご記入ください

調査協力の依頼時に、本調査の目的、倫理的配慮などについて文書による説明を受けました。
私の意思で本調査に協力することに同意いたします。

同意される場合は、()に○をつけてください。()

I. ここでご回答いただく本学の卒業生は卒後何年目ですか、適切な番号に○をつけてください。					
1.	1年目	2.	2年目	3.	3年目
II. 本学の卒業生の能力に対するお考えをお聞かせください。 各項目について、適切だと思う番号を1つ選んで○をつけてください。					
		そう 思わ ない	あ ま り そ う 思 わ ない	ど ち ら と も い え ない	や や そ う 思 う
II-1	人間に対する深い理解を身につけている。	1	2	3	4
II-2	倫理観を身につけている。	1	2	3	4
II-3	人々の喜びや悲しみ、痛みや苦しみを分かちあえる豊かな感性を身につけている。	1	2	3	4
II-4	自己のもてる力を差し出せる温かい心を身につけている。	1	2	3	4
II-5	人間を取り巻く自然、社会、文化関係を総合的な視野から思考することができる。	1	2	3	4
II-6	社会情勢の変化(少子高齢の進展や生活・療養の場の多様化など)に主体的・創造的に対応する基礎的能力を身につけている。	1	2	3	4
II-7	科学技術の発達(医療技術や生命科学の進展など)に主体的・創造的に対応する基礎的能力を身につけている。	1	2	3	4
II-8	さまざまな健康状態の人々と関わることのできる専門知識を修得している。	1	2	3	4
II-9	さまざまな健康状態の人々と関わることのできる技術を修得している。	1	2	3	4
II-10	個別的な看護ニーズを見いだす基礎的能力を身につけている。	1	2	3	4
II-11	科学的根拠に基づいた実践ができる基礎的能力を身につけている。	1	2	3	4
II-12	自己の専門職に対する誇りと責任感をもっている。	1	2	3	4
II-13	看護の果たすべき役割を追究している。	1	2	3	4
II-14	保健・医療・福祉等関連領域の人々と専門職者として協働できる力を身につけている。	1	2	3	4
III. 総合的にみた本学の卒業生の能力に満足しているかお聞かせください。 適切だと思う番号を1つ選んで○をつけてください。					
1.	不満足	2.	やや不満足	3.	どちらでもない
4.	やや満足	5.	満足		
IV. 本学の卒業生の良いところや課題などにつきまして、ご意見があればお聞かせください。					

資料2 卒業生のディプロマポリシーに基づいた修得度と施設の満足度の相関 N = 121

4つのディプロマポリシーの細目		平均	SD	最少	最大	相関
基本	1) -1 人間に対する深い理解を身につけている。	3.55	0.88	1	5	0.665
	1) -2 倫理観を身につけている。	3.65	0.80	1	5	0.628
	1) -3 人々の喜びや悲しみ、痛みや苦しみを分かちあえる豊かな感性を身につけている。	3.75	0.85	1	5	0.647
	1) -4 自己のもてる力を差し出せる温かい心を身につけている。	3.91	0.87	2	5	0.653
ディプロマポリシー①		3.72	0.75	1.25	5.00	0.733
普遍	2) -5 人間を取り巻く自然、社会、文化関係を総合的な視野から思考することができる。	3.30	0.87	1	5	0.625
	2) -6 社会情勢の変化(少子高齢の進展や生活・療養の場の多様化など)に主体的・創造的に対応する基礎的能力を身につけている。	3.13	0.88	1	5	0.533
	2) -7 科学技術の発達(医療技術や生命科学の進展など)に主体的・創造的に対応する基礎的能力を身につけている。	3.23	0.78	1	5	0.492
ディプロマポリシー②		3.22	0.77	1.33	5.00	0.609
専門基礎・専門	3) -8 さまざまな健康状態の人々と関わることのできる専門知識を修得している。	3.29	0.89	1	5	0.531
	3) -9 さまざまな健康状態の人々と関わることのできる技術を修得している。	3.17	0.85	1	5	0.540
	3) -10 個別な看護ニーズを見いだす基礎的能力を身につけている。	3.41	0.93	1	5	0.665
	3) -11 科学的根拠に基づいた実践ができる基礎的能力を身につけている。	3.38	0.82	1	5	0.506
ディプロマポリシー③		3.31	0.77	1.00	5.00	0.642
専門	4) -12 自己の専門職に対する誇りと責任感をもっている。	3.70	0.88	1	5	0.554
	4) -13 看護の果たすべき役割を追究している。	3.37	0.91	1	5	0.628
	4) -14 保健・医療・福祉等関連領域の人々と専門職者として協働できる力を身につけている。	3.49	0.90	1	5	0.545
ディプロマポリシー④		3.52	0.77	1.00	5.00	0.669
ディプロマポリシー合計		3.44	0.69	1.31	5.00	0.737

*「1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらともいえない 4. ややそう思う 5. そう思う」の番号を点数化して集計した。

* 分析はピアソンの積立相関係数を用いた。

資料3 本学の卒業生のよいところと課題（自由記述） N=76（110）

内容	良い面数（%）	課題数（%）
看護職者として必要な基本的姿勢と態度[56]	39（66）	20（34）
真摯に取り組む姿勢：主体性・探求心 [28]	20（71）	8（29）
“探究的な視点が養われており、積極的に学んでいく姿勢がある”“真摯に学ぶ姿勢があります”		
“積極性に欠けます”“自立できていない、指示待ち、自主性に欠けると感じる場面がある”		
同僚や他の医療従事者との適切なコミュニケーション [15]	9（60）	6（40）
“情報の発信もカンファレンス等でできている”“素直な人間が良いところ”		
“質問には答えるが、自ら報告することが少ない”		
“連絡、報告、相談がタイムリーにできない場面や意思表示がなく困惑する場面があります”		
社会人、看護者としての自覚・責任 [10]	6（60）	4（40）
“仕事に対する責任感が強い”“勤務態度も良好である”		
“課題としては時間管理・多重課題・他者への報告方法など努力を要すところではある”		
“うまく報告出来ず周りから事実を聞くことがある”		
他者との協働、リーダーシップ [4]	4（100）	0（0）
“前向きで協調性があり、チームの一員として頑張ってくれています”		
“困難にあった時、SOSを発信しサポートを求めることができる”		
倫理観 [2]	0（0）	2（100）
“倫理観を身につけることが課題”“スタッフ間で倫理的な配慮に欠ける発言がある”		
看護実践における知識・技術的側面[43]	28（64）	16（36）
患者、家族に対する受容的・共感的態度および、良好な関係性の確立 [18]	16（89）	2（11）
“患者の訴えによく耳を傾け、丁寧に対応できている”		
“患者のことを中心に考え、温かい心で看護を丁寧に実践している”		
“心の機微が表情などから読み取りにくく、患者さんにとっての共感的・受容的姿勢が伝わりにくい印象がある”		
“患者様と円滑な関わりをする方法として、内緒ごとを作ることがある”		
基本的な知識・技術の獲得 [14]	8（57）	6（43）
“基本的な技術や知識を丁寧に言うことができる（手順・基順を守る）”		
“教わったことはエラー少なく実践することができる”		
“安全確認行動ができず思い込みで行動しインシデントが多い。”		
“突発的なことが起きるとスケジュールがぐずれてしまい優先順位が見えなくなる”		
対象を多角的視点で捉える [12]	4（33）	8（67）
“感受性が豊かで、患者への関わり方・ニーズを見いだそうと努力する姿勢に長けています”		
“ナイチンゲール看護論をベースにした対象の捉え方は、他の看護職員の手本となっている”		
“疾患から考えられる予後や急変のリスクなど、アセスメントすること、それを表現（文字化）できる事が、もう少し学生の間で学んで欲しい”		
“患者の個を捉えるというより、現象レベルに目が向くようで根拠まで至りません”		
その他 [7]	0（0）	7（100）

Materials

A Satisfaction Survey on the Competency of Graduates

Kayoko Shigehisa, Mizuyo Kawahara, Erina Katsuno, Shingo Kuzushima

【Key words】 academic achievement, diploma policy, employer satisfaction,
bachelor graduate nurses, competency